

我なり

——マルコ伝第14章43～73節——

小池辰雄

1965年6月27日

靈的傲慢と卑劣漢 忠誠 彼岸の人 活ける宮 我なり 我はそれなり 自己否定 原因であり目的 贖われたる我 与えられたる新しき我 我らを見よ

【マルコ14・43～73】

⁴³なお語りい給うほどに、十二弟子の一人なるユダ、やがて近づき来る祭司長・学者・長老らより遣わされたる群衆、剣と棒とを持ちて之に伴う。⁴⁴イエスを売るもの、預め合図を示して言う『わが接吻する者はそれなり、之を捕らえて確と引きゆけ』⁴⁵斯て来りて直ちに御許に往き『ラビ』と言いて接吻したれば、⁴⁶人々イエスに手をかけて捕らう。⁴⁷傍らに立つ者のひとり、剣を抜き、大祭司の僕を撃ちて、耳を切り落とせり。⁴⁸イエス人々に對いて言い給う『なんじら強盜にむかう如く剣と棒とを持ち、我を捕らえんと出で来るか。⁴⁹我は日々なんじらと偕に宮にありて教えたりしに、我を執らえざりき、然れど是は聖書の言の成就せん為なり』⁵⁰其のとき弟子みなイエスを棄てて逃げ去る。

⁵¹ある若者、素肌に亞麻布を纏^{あま}ひいて、イエスに従いたりしに、人々これを捕らえければ、⁵²亞麻布を棄て裸^{はだか}にて逃げ去れり。

⁵³人々イエスを大祭司の許に曳き往きたれば、祭司長・長老・学者ら皆あつまる。⁵⁴ペテロ遠く離れてイエスに従い、大祭司の中庭まで入り、下役どもと共に坐して火に暖^{あたた}まりいたり。⁵⁵さて祭司長ら及び全議会、イエスを死に定めんとて、証拠を求むれども得ず。⁵⁶夫はイエスに對して偽証する者、多くあれども其の証拠あわざりしなり。⁵⁷遂に或者ども起ちて偽証して言う、

⁵⁸『われら此の人の「われは手にて造りたる此の宮を毀^{こぼ}ち、手にて造らぬ他の宮を二日にて建つべし」と云えるを聞けり』⁵⁹然れど尚この証拠もあわざりき。⁶⁰爰に大祭司、中に立ちイエスに問いて言う『なんじ何をも答えぬか、此の人々の立つる証拠は如何に』⁶¹然れどイエス黙^{もだ}して何をも答え給わず。大祭司ふたたび聞いて言う『なんじは頌^ほむべきものの子なるか』⁶²イエス言い給う『われは夫なり、汝ら人の子の、全能者の右に坐し、天の雲の中にあ



りて来るを見ん』⁶³此のとき大祭司おのが衣を裂きて言う『なんぞ他に証人を求める。⁶⁴なんじら此の瀆言を聞けり、如何に思うか』かれら挙りてイエスを死に当たるべきものと定む。⁶⁵而して或者どもはイエスに睡し、又その顔を蔽い、拳にて搏ちなど為始めて言う、『預言せよ』下役どもイエスを受け、手掌にてうてり。

66。ペテロ下にて中庭におりしに、大祭司の婢女の一人きたりて、⁶⁷ペテロの火に煖まりおるを見、これに目を注めて『なんじも、かのナザレ人イエスと偕に居たり』と言う。⁶⁸ペテロ肯わずして『われは汝の言うことを知らず、又その意をも悟らず』と書いて庭口に出でたり。⁶⁹婢女かれを見て、また傍らに立つ者どもに『この人は、かの党与なり』と言い出でしに、⁷⁰ペテロ重ねて肯わず。暫くしてまた傍らに立つ者どもペテロに言う『なんじは慥に、かの党与なり、汝もガリラヤ人なり』⁷¹此の時ペテロ盟い、かつ誓いて『われは汝らの言う其の人を知らず』と言い出づ。⁷²その折しも、また鶏鳴きぬ。ペテロ『にわとり一度なく前に、なんじ二度われを否まん』とイエスの言い給いし御言を思いいだし、思い反して泣きたり。

●靈的傲慢と卑劣漢

43 なお語りい給うほどに、十二弟子の一人なるユダ、やがて近づき来る、祭司長・学者・長老らより遣わされたる群衆、剣と棒とを持ちて之に伴う。⁴⁴イエスを売るもの、預め合図を示して言う『わが接吻する者はそれなり、之を捕らえて確と引きゆけ』⁴⁵斯て來りて直ちに御許に往き『ラビ』と言いて接吻したれば、⁴⁶人々イエスに手をかけて捕らう。⁴⁷傍らに立つ者のひとり、剣を抜き、大祭司の僕を撃ちて、耳を切り落とせり。⁴⁸イエス人々に對いて言い給う『なんじら強盜にむかう如く剣と棒とを持ち、我を捕らえんと出で来るか。⁴⁹我は日々なんじらと偕に宮にありて教えたりしに、我を執らえざりき、然れど是は聖書の言の成就せん為なり』⁵⁰其のとき弟子みなイエスを棄てて逃げ去る。

ユダというのは弟子の中でも優れた弟子であつたと思われます。そのことはいろいろな本に書いてある。他の弟子たちも、よもやユダがイエスを裏切ろうとは思わなかつたらしい。ところが、ちょうど、天使の中でもサタンになつたのは天使の首かしらであつた。それが

「神の如く」

といつて、傍若無神に自分が神にのしあがろうとした。神に争おうとした。ここにサタン的の神精神というものがある。靈的傲慢というやつ。このユダにこのよだんな靈的な傲慢な気持がさして、ついにキリストを売るよだなことになる。



靈的な傲慢というものが最大の罪であつて、ダンテも地獄の中でこのサタンをどん底に置いている。そしてまた、主を裏切る者、國を売る者、そういういた連中が地獄の一番どん底にやられる。そういう事態がここに残念ながら起きた。イエスはそのことを既に洞察しておられる。しかも、いかにも親しげにキリストに接吻するほどの動作をして、それが裏切りの合図であるというんですから、実に言語道断なことです。偽りもはなはだしきものである。ところが、

⁵⁰其のとき弟子みなイエスを棄てて逃げ去る。

と。普段、信頼していた、親しいと思っていた弟子たちがみんな逃げ去つてしまつた。マルコ伝記者がもしマルコとするならば、マルコ自身も逃げ去つてしまつた。イエスの懷に、胸に寄るといつていたヨハネも、またその例外ではない。まことに情けないことですが。靈的傲慢と、今度は卑劣漢ということ。しかしながら、そういういた要素が我々罪びとの中に何%かはあるというのが、実に情けない生まれつきの人間の姿である。

●忠誠

けれども、日本の歴史を顧みると、赤穂義士のごときは正に主君に対する忠誠を死をもつてこれを全うした。内村鑑三先生が、

「福音は、武士道に接ぎ木されるときに、最もそれが健全に日本的な福音として展開する」

ということを強調されています。日本は武士道という、士道という、さむらいの道です。もちろん、封建的な枠の中には、いわゆる義理にからまれて、実に何ともいえない暗黒の面があるけれども、しかしま、忠誠という側のひとつの大変な面は、これはやはり日本人として大いに過去の善きものは評価しなければならない。

ものを見るときには、その中のどういう面において間違いがあり、どういうところに本当に大事なものがあるかということを冷静に見る目を持たなくてはいかん。聖靈というものは、知恵聰明の靈であつて、そういうものを両刃の剣で突き分けて、正しいものは正しいものとし、善きものは善きものとし、美しきものは美しきものとする。パウロがそういう使徒でした。

「およそ、そういうものを尊べ」

とパウロが言っています。パウロという人は実に素晴らしい幅を持つた使徒です。何という使徒かと思います。その深き、幅の広き、高き。これはみなキリストから来ているんですねけれども。私たちは、御靈と言うならば、御靈はまた聰明の靈であるということを忘れてはいかん。

そういう忠誠です。

「七生報国」



という、楠木正成の言葉もありますが。この「忠」というのは正に、心（信）を貫くことなんです。信実一貫という。

「たとえ法然にすかされても」

という。それは幸福主義とは全然反対であって、法を尊ぶ。仏法を、また仏道を。

と親鸞が言いました。親鸞の信仰が正にまたそれである。

「たとえ地獄に落ちても」

「我は道なり」

という、キリストという道を道するのである。

それが、弟子たちはみな落第してしまった。赤穂義士というような、また弁慶というような存在がいつまでも日本人の心を打つてているのはやはり、人間の一番中心の、この信義の世界です。これが我々日本人を打つわけです。私は、とにかくいわゆるクリスチヤンよりも、日本人らしい日本人でありたいと思います。

人々は、私たちの福音の——構造といいますか、幅といいますか、質といいますか——それを知らないから、いろいろ躊躇しているようですけれども。皆さんはどうか、

「父の全き」

というその「全き」というものはどのようなことであるか、ということを生涯をかけて限りなく身につけていかれるように。なんと、福音の世界は素晴らしいかな、どこに間違いがあるか、というような本当に凄い生命力と、また聰明な本当の光と、もの凄い幅をもつた知恵と、それから、一番大事なのは、一切を生命づけるところの愛です。

今、司会者がローマ書12章を読まされました。本当にパウロという人は何という素晴らしい実存をそこに告白しているかなと思う。ローマ書12章のごとき、こういつた精神がある限り、福音は絶対に滅びません。どこからつつ笑いても、これに非難するところがあるかという。正に、聖霊の知恵の、また愛の、光の告白である。決して、いわゆる単なる徳目をあげているのでも何でもない。

●彼岸の人

ところが、彼らが躊躇いたのは、言うまでもなく、彼らとキリストとの間にどうしても渡ることのできない大きな溝があるからです。キリストは彼岸の人である。弟子たちは此岸の人である。

「みんな私に躊躇くよ」

と、その前にキリストは預言しておられた。

⁵¹ある若者、素肌に亞麻布を纏^{あま}_{まと}いて、

おそらく、この「ある若者」というのがマルコではないかと言われている。

イエスに従いたりしに、人々これを捕らえければ、⁵²亞麻布を棄て裸^{はだか}にて逃



「去れり。

「私はこんなにして逃げてしまつたんだよ」

と、もしこれがマルコなら、そういうことです。

「どんなことがあつても、死んでも、私はあなたに従つて行きます」

と、力んで言つた。ペテロが、その次に出てくるような始末です。

53人々イエスを大祭司の許に曳き往きたれば、祭司長・長老・学者ら皆あ

つまる。54ペテロ遠く離れてイエスに従い、

もう既に遠く離れているわけです。

大祭司の中庭まで入り、下役どもと共に坐して火に暖まりいたり。55さて祭司長ら及び全議会、イエスを死に定めんとて、証拠を求むれども得ず。56夫はイエスに對して偽証する者、多くあれども其の証拠あわざりしなり。57遂に或者ども起きて偽証して言う、58『われら此の人の「われは手にて造りたる此の宮を毀ち、手にて造らぬ他の宮を三日にて建つべし』と云えるを聞けり』ヨハネ伝2章です。これは注目すべき言葉です。キリストでなければ、こんなことは言わん。

17節あたりから。これは宮清めのところですね。

「17弟子たち『なんじの家をおもう熱心われを食わん』と録されたるを憶い出せり。18ここにユダヤ人こたえてイエスに言う『なんじ此等の事をなすからには、我らに何の徴を示すか』19答えて言い給う『なんじら此の宮をこぼて、われ三日の間に之を起こさん』20ユダヤ人いう『この宮を建つるには四十六年を経たり、なんじは三日のうちに之を起すか』21これはイエス己が體の宮をさして言い給えるなり。』（ヨハネ2・17～21）

全然、問答がちぐはぐです。イエスは、おもしろいですね、なぞのようなことをおつしやつて、あとは知らん顔している。説明はなきらない。

「聞く耳あるものは聞くべし」

だ。マタイ伝では26章に書いてある。

「60多くの偽証者いでたれども得ず。後に一人の者いでて言う、61『この人は「われ神の宮を毀ち三日にて建つべし」と云えり』62大祭司たちてイエスに言う『この人々が汝に對して立つる証拠に何をも答えぬか』63されどイエス黙し居給いたれば、大祭司いう『われ汝に命ず、活ける神に誓いて我らに告げよ、汝はキリスト、神の子なるか』64イエス言い給う『なんじの言える如し。かつ我なんじらに告ぐ、今より後、なんじら人の子の、全能者の右に坐し、天の雲に乗りて来るを見ん』（マタイ26・60～64）

「自分は、十字架を、苦難を受けて三日目に甦る」ということを弟子たちに、特に親しい弟子たちに幾回か語つておられる。「三日目」という



のが、キリストはちゃんともうそれを見て知つておられる。金曜の午後3時に十字架において息絶える。その次に、金曜の夕方から土曜になるから、それから、土曜の夕方までが一日。土曜の夕方から今度は、我々でいうところの日曜に入つていくわけです。だから、ちょうど三日目になる。三日目の朝に甦られるわけです。なんと不思議な人でしょうね。十字架に付いて三日目の朝に甦るということを、ちゃんともう予言しておられる。とても、それは考えられないことです。時間も空間も、場所も支配している人です。

●活ける宮

46年かかった大神殿を見て、何を驚嘆しているかと。一番驚嘆すべきものは、活ける宮であるということです。ヨーロッパへ行くと、実に大きな寺院がある。芸術的には、私も素晴らしいなと思うけれども、ひとたび信仰の世界に立ち入つてこれを見ると、おやと思う。ここで宗教的雰囲気に浸ることがキリストの宗教かと。

我々は正直、どこへ行きましても、ありがたいことに、このイエスが、御靈のイエスが宿つていれば、世界中いざこに行きましても心安しということです。

「神の国」

というの

「神の支配するところ」

ということ。即ち、神に在つて、キリストに在つて支配するところのものに自分がおかれている。どこへ行つても、みなそれぞれの所で、楽に証し人となつていかれる。何も心配いらん。いたるところが故里です。

「われは手にて造りたる此の宮を**毀**ち、手にて造らぬ他の宮を**三**日にて建つべし」

とは痛快な言葉ですね。

「三日目に私は活ける宮となつて立ち上がつてくるぞ」

と。何という勝利の人でようね。これほどの勝利の人は、いまだかつてない。大勝利なんて言つたつて、イエス・キリストは桁違の勝利です。どんな英雄がいたつて、ナポレオンもシーザーもかなわない。ナポレオンもセントヘレナで、

「ナザレのイエスはやはり勝つた」

と告白した。

神の国は必ずきたる。イエス・キリストのこの勝利が、永遠の生命をもつて現じてきたところのキリストの勝利なんです。天界に昇天し、靈界で神の右に在り給うところのこのキリストなんです。深い祈りの世界では、まばゆくて見えないキリスト。我々の主というのは、そのような素晴らしいかたである。クリスチヤンはこの勝利者に結びついて、どうして、くすぶつていられるかというわけです。



⁵⁹然れど尚この証拠もあわざりき。⁶⁰爰に大祭司、中に立ちイエスに聞いて言う『なんじ何をも答えぬか、此の人々の立つる証拠は如何に』⁶¹然れどイエス黙して何をも答え給わず。

一番大事な問題に對してだけ答える。第二義、第三義のことなんかはどうでもいい。一番大事な問題に對して、ズバリ答えられる。それに答えれば、もう十字架です。十字架の答です。それはゲッセマネの祈りで、キリストははつきりとそのことを受けとられたから。

●我なり

大祭司ふたたび聞いて言う『なんじは頒むべきものの子なるか』キリストであるか、メシヤであるかと。

⁶²イエス言い給う『われは夫^{それ}なり、

「エゴ エイミ」

というギリシャ語です。イエスはアラニ語で、おそらく一字です。ただ

「われ

という一字。「それなり」も何もありはしない。

「我なり」

と。おそらく、キリストの言葉では、「われ」という字だけです。たつた一語をもつて、

「われだ」

と言う。

「私がメシヤだ」

と。十字架につくこの私がメシヤだと。それで民衆も弟子たちも全部、そのことに躊躇しているわけです。また、それによつて躊躇してしまう。

ところが、イエスは、ダニエル書の

「人の子」

という言葉と——あれは「メシヤ」ということ——イザヤ書53章の「すべての人のために己を碎いてその罪を担う、贖う」

ということをピタリ結びつけて受けとつておられるわけです。旧約聖書の一切を彼自身が受けとつて、旧約聖書を破つてしまつてはいる。これは破棄して成就するんです。

「律法を満たす」

というけれども、律法を破棄して成就するんですよ、キリストの成就というのは。ただもつたいぶつてはいるのではない。もの凄い激しいものです。そんなものはいらんと。乱暴に言えば、

「旧約聖書はいらん。私の中に全部それが新しい意味でもつてつかまえられている。ユダヤ人のつかまえているような旧約聖書ではないぞ」



と。その奥が読めていない。その奥を開示する。モーセの十誡の奥を語っているのが、キリストの山上の垂訓です。なにさま、次元の違つたものが現れてきた。絶対次元です。二次元の、三次元のなんて言つてはいる世界ではない。これは絶対次元です。絶対次元の世界がここに開示されてきた。

「我はそれなり」

というこの一言をもつて、私たちはこの年の前半期の集会を終わることを私は不思議に思う。全聖書はこの福音書に焦点を結んでいます。また、福音書の中で、今日のこの「我なり」というこのキリストの言葉は、その最も中心の激しい言葉です。二義、三義、四義のことには答えないで、第一義のことだけにキリストは「我なり」と答えた。

「我はメシヤである。我はキリストである」

と。今でこそ、

「キリスト・イエス」

と言つて、私たちは常識のように言うけれども、この時にイエスが呼ばれたこの一言は、驚天動地の言葉である。これが決定的な言葉です。ペテロも、

「汝は神の子、キリストなり」

と言つて、カイザリヤ・ピリポの道で告白はしたようなものの、ペテロはまだその時に一時的なひらめきで言つただけの話で、本当にらわたの底からペテロだつて受けとつてはいられないわけです。ペテロ、ヨハネ、ヤコブ、パウロが本当に

「主よ、キリストよ」

と叫ぶことのできるようになったのは、何としても聖霊のバプテスマを受けてからの話であつて、それまでは絶対にこれが言えない。

クリスチヤンも、キリスト教に入つて、あるいは教会で洗礼を受けて、

「主よ、主よ。キリストよ」

とやつてますよ。私だつて、無教会で何10年かやつてきた。偽りではない。みな結構です。けれども、本当に

「わが主よ、わがキリストよ」

と言つて、もうそれでなければどうにもならん、キリストでなければと。

「主さま、あなたでなければ、私はどうにもなりません」

という、このどうにもならないただ一人の相手というものを本当に告白できて、そして、

「もう何がどうなつてもよろしい」

というような魂になるのは、これは聖霊のバプテスマを受けなければ、そうならない。

人間は、いろいろなことがありますよ、お互にさま躊躇したり転んだり。けれども、いろいろなガタガタでござりますけれども、それがいつも事態を乗り越えて、そして、本



当に

「この主だから」

と言つて、お互に本当に信じぬき、愛しぬき、赦しぬいて進むという、この力は、本当に御靈をもつてキリストを告白する人でなければできない。また、その間ならば大丈夫です。

ただ「十字架」と言つてたつてダメです。無教会は、それは十字架だから、ある程度はいいんです。危機をその十字架で突破しています。けれども、やはりどこかまだつつかえている。そのつつかえたようなものがなくなるということは——これはたとえあつたつてそんなものは問題でないという、突き抜けというものがあるということは——それはこの聖靈の世界に来たクリスチヤンでなければ、

「そうだ」

と互いに言えない。私たちはお互のあいだに、何かそういうわだかまりがあるなら、それはいかん。

「何だね？」

と——第三者をとおす必要はない。第三者を通すことはいらん——お互いさま本当に胸襟をわつて、

「どうしたんだい？」

というわけで、一対一の関係で話し合つたらいい。必ずこの福音の世界ならば、お互に突破していくはずです。人間的なものがもし第一に立つたら、お互にダメになる。

主が立ち給うところには、どのようなマイナスも、どんな経験も全部プラスに、もの凄いプラスに変えられていく。それだけ積極的な——人生観ではない——人生道である。どうか、皆さん、この福音を受けたらば、この証し人にならなかつたらまらんですよ、信仰なんて言つたつて。

「とにかく知らんが、私の中には、月々歳々、もう何とも言えない推進力がやつてきました」

という一人ひとりに、皆さんがなつてくださいなくては。そうでしょ。

●我はそれなり

「我はそれなり」と、キリストは即ち、

「キリスト、メシヤである」

と言つて告白された。

汝ら人の子の、全能者の右に坐し、天の雲の中にありて来るを見ん

まだ、そのことは、「再臨」は実現しません。けれども、再臨とは別なかたちで実現してしまつた。それは既にヨハネ伝で約束されているところの「約束の靈」が雲を貫いて、天を裂いて、風の如く火の如くに臨んできた。



⁶³此のとき大祭司おのが衣を裂きて言う

これは旧約にもよく出てくる表現です、悔改めや悲しみのときに。

『なんぞ他に証人を求める。⁶⁴なんじら此の瀆言を聞けり、如何に思うか』

キリストは

「人の罪を赦す」

と言われたが、

「神さまのほかに罪を赦すものはない」

と彼らユダヤ人は思つてゐるわけです。

「これは、自分はメシヤであると称える」

と——しかし、その頃、偽預言者がちよこちよこ現れているから、キリストがマルコ伝13章でおつしやつたように、

「偽キリストが出てくるから気をつけろ」

というようなことを言われた——

「この瀆言を直接に聞いたから、もう証人はいらん」と。

かれら挙りてイエスを死に当たるべきものと定む。⁶⁵而して或者どもはイエスに睡し、又その顔を蔽い、拳にて搏ちなど為始めて言う、『預言せよ』下役どもイエスを受け、手掌にてうてり。

「誰が打つたか預言してみろ」

なんてなわけです。占いにそういうのがいるよね。財布の中にどれくらいの金があるとか、その人が何という名前か、見ないで言うとか。そういう占い人とキリストは違う。まじわざ、占いはいかんと、旧約聖書にも書いてある。

⁶⁶ペテロ下にて中庭におりしに、大祭司の婢女^{はしため}の一人きたりて、⁶⁷ペテロの火に燃^{あたた}まりおるを見、これに目を注^とめて『なんじも、かのナザレ人イエスと偕に居たり』と言う。⁶⁸ペテロ肯^{うけが}わずして『われは汝の言うことを知らず、又その意をも悟^{うけが}ら^{こころ}ず』と書いて庭口に出でたり。⁶⁹婢女かれを見て、また傍らに立つ者どもに『この人は、かの党与^{ともがら}なり』と⁷⁰ペテロ重ねて肯^{うけが}わ^しず。暫くしてまた傍らに立つ者どもペテロに言う『なんじは慥に^{たしか}かの党与^{ともがら}なり、汝もガリラヤ人なり』⁷¹此の時ペテロ盟^{うけ}い、かつ誓^{にわとり}いて『われは汝らの言う其の人を知らず』と言い出づ。⁷²その折しも、また鶏鳴きぬ。ペテロ『にわとり一度なく前に、なんじ二度われを否^{かえ}まん』とイエスの言い給いし御^{おん}言を思^いいだし、思^い反して泣きたり。

「そういうことになるよ」と、キリストはもう予言して、ペテロに、



「三回私を否定し、そうしたら、鶏が一度目に鳴くぞ」と言われた。何という不思議な人でしょうね。

「ユダは裏切り、ペテロは否定」と、こういふわけです。

●自己否定

自己否定ができるまでは、我々罪びとはキリストを否定。そういう卑劣なものです。

「己が生命をも憎まずば、わが弟子とはなれない」

とキリストは言われた。これは至難なことです。人間というものは、ご飯を食べ水を飲むことが自然であるように、自己愛というものは自然なんだ。キリストも、

「己を愛する如く隣を愛せ」

と、「己を愛する如く」と、とにかく言われた。己を愛する自愛というものは——

「どうぞ、ご自愛ください」

なんて手紙に書くが——自愛というものは根本衝動です。ところが、

「自分を憎め」

と言う。これはできないわけです。

自己完成というものは、自愛の方の角度だ。道徳、修養、文化的いろいろな意味において自己を完成していく。

「自己完成というものは悪くはないではないか、自己を憎んだら自己完成が成り立つか」

というようなわけです。そこに福音の真理の激しさがあるわけです。

ところが、福音の世界は、

「直接的な自己完成というものは本当のところに行かないで、自己否定していふものが実は本当の自己完成になる」

という、絶対矛盾の構造である。

「死して生くる」

のであって、生がただ生に展開していくのではない。死生の転換が本当の生である。自己を否定するということは死の世界だから。自己を完成するということは生の世界です。

「己の生命を求める者は反つてこれを失い、己を棄てる者は反つてこれを得る」

というのはそのことです。得んがために棄てるのではない。そうすると、それは幸福主義であり、一種の功利主義になる。ひとつの手段、方便になる。そんなことで本当の世界は展開しない。これがいわゆる

「文化的自由人は福音が掴めない」

ゆえんなんです。いわゆる自由思想というやつは、そこで福音というものが躊躇なんです。



「それは文化の否定ではないですか」

「その否定をして本当にその奥の世界に行つたときに、初めて真の文化が展開して

いく」

という世界なんですから。その構造が分からないとね。

私は「宗教と文化」でも書いたように、樹木に例えると、地面から上に伸びていくのは文化の世界です。宗教は根つこの世界で、次元が違う、層が違う。これは下に限りなく深くなる。そのときに、幹や枝葉は反対の方向に伸びていく。空間の世界、見える世界です。根は見えざる世界です。見えざる世界は宗教の世界、福音の世界です。見ゆる世界が文化の世界。この幹になつてているのが、道念、道徳です。道念の世界。

人間の営みの中に、この倫理というものが没却されたらお終いです。しかし、倫理は倫理だけでは立たない。道念や倫理の世界は、この宗教の深い世界によつてはじめて本ものとなり、これが媒介となつて、一切の人間の営みがそこに生ずる。何をしましても、この幹を通つてはいるはずなんです。方向は反対で次元は違うが、しかし、この根によつてはじめて幹が生かされるのであつて、幹が生かそうとしているのではない。こつち（幹）は考えないでいくと、そうなる。もちろん、人間の構造は、並行して考えるという現実ももちろんあるけれども、根本的な自覚としては、何としてもこの根が第一義的なものであり、中⼼である。

●原因であり目的

イエスという人は、キリストという人は、自己否定をしていつた方なんだから、しようがない。

「なぜ、私のことを善いと言ふか。神さまの他に善きものはない」と言つて、否定しておられる。

「私がいろんなことを言えると思つてゐるか。何も言えない。神さまが言えということを言つてゐるだけの話だ。私が素晴らしい業をしてゐると思うか。神さまがその力をもつて業をなさしめたもうだけの話だ」と言ふ。

「あなたの御意を、どうか、この私を通してやつてください」と言つて、全部、自己を獻供してゐる。自己を獻げてしまつてゐる。即ち、自己なんていうものを思つていたら、そんなものはみんな相対的なもので、ダメになつてしまふ。こんなものはダメだ、ダメだという。しかし、

「ダメだ、ダメだ」

と言つて、しょげてしまふことではない。大事なものがあるから。



では、自己を否定して、その自己をどこに持つていいかというと、キリストの中へもつていくんです。外へ持つていくのではない。キリストの中へこのしようがないやつを棄て込むんです。キリストは、ごみ溜み^{ため}みたいなものです。我々罪びとを、キリストはもの凄いごみ溜で受けとつてくれる。みな浄化してしまうんだ——ちょっとおかしな話だけれども——浄化槽みたいだ。キリストはこれをみんな浄化してしまう。私たちは、「こんなしようがないやつはもう」

と言つて、自己をキリストの中に棄てると、そこから本当に、自己完成なんていうことは考えなくても、完成に向かつていく。

もし、「自愛」という言葉を生かそうとするならば、

「主の故にこの賜りたる我というものを、主の故に本当に大事にしなくてはいかん」わけです。福音のために大事にしなくてはいかん。福音のために私たちの存在は、おろそかにしてはいかん。その意味においてなら、自愛です。

それはもっぱら

「福音のため、キリストのため」

である。「ため」というのは、何か二段構えの「ため」ではない。在ることが直ちに「ため」なんです。何かもつたいたぶつたような、「キリストのために」なんていう殊勝な考えのような、そんな「ために」はひとつも力になりはしない。

「在ること」が、棄てることが同時に、キリストの故に原因であり目的である。キリストはわが原因であり、わが目的である」

と。そうしたらば、J君はJ君らしく、T君はT君らしく、それで完璧なものに向かわせられていくわけです。

●贖われたる我

そのような祈りの故に、「キリストのために」という自覚において、キリストと共に「我なり」ということ。我とキリストとは一つである。

「もう私は生きていません、この私がキリストと一つである」とパウロが言つた。だから、「我はそれなり」という、「我なり」という、このキリストの言葉が今度は、私たち一人ひとりの自覚となつて、

「我なり。私だぞ」

と言えるわけです。これは紙一重で靈的傲慢になるですよ、この「我なり」は。けれども、本当に贖われたる我というこの自覚です。

「私はキリストに贖われたので、キリストでなければどうにもならんやつです」と。全く我が棄てられてキリストが生きているときに、この我という自覚が最高最深である。絶対矛盾の自己同一というのは、その意味においてだけ言える。西田先生のものを読んだ



つて、分かるんですよ、このキリストの光で読めば。「西田哲学は難しい」と言うけれども、難しくない。聖霊の世界というものは本当に不思議な知恵の世界です、不思議な光の世界です。

皆さん、もう本當ですよ、これは。世界中のどんな凄いものであつても、驚きませんよ。それが哲学であろうと、文学であろうと、芸術であろうと、何であろうと。このキリストの目で見るんだから。聖霊の光でもつてこれを見るんだから。どうか、それだけの自信ならざる本当の自信をいよいよ磨き上げてください。

「どんなに桁違いな世界に我々が今、導かれつつあるか」ということをね。

毎日が楽しくてしようがないではないですか。そういう真理の世界を身につけさせられながら行くんだから。何をやつたつて、そうですよ。私は昨日、学校で

「野球をしよう」

というから、

「ああやるよ」

と。学生時代よりか打てるもの。2打席2安打だ。

「小池さんはよほど若い時にやつたな」

なんて、そうじやない。何年もやらなくたつて、この通りでございというわけです。ショートをやつたつて、もの凄いスピードが出る。ちょっと不思議ですよね。それはエラーもちょっとやつたけれどもね（笑）。今日は身体は痛くも何ともない。

とにかく、何にしましても、

「このキリストでなければ」

という何とも言えない、それがもう祈りなんです、私はどこを歩いていても。だから、

「我はそれなり」

というこのイエスの一言が——

「イエスさまはそうちだが、私はそうちじゃない」ではないですよ——あなた方一人ひとりがこのキリストにおいて「我はそれなり」ということ。どうか、いざこにおきましても、「我はそれなり」という証言ができなくてはいかん。

「私を否む者は、また私も天国で否むぞ」

とキリストが言つておられる。

●与えられたる新しき我

私は今度、譜面も読めないくせに、学校でコーラスの部長になつた。30名くらいの部員がいる。夏に4泊5日の合宿をするという。小諸の方に行く。私は

「行くよ」



と言つた。ちょうど日曜が挟まつてゐるから、ひとつそこでもつてコーラスの部員に福音を説いてしまおうと思う。もう機会をつかまえては証言する。嫌われようが構いやしない。

今、選挙でもつて大いに自己宣伝をやつてゐるでしょ。いわゆる自己宣伝ではなくて、福音宣伝は、福音証言は、皆さん、もう至るところにその機会があるから——何もそれは、何と言ひますかね、嫌らしいことは要りませんよ——けれども、そこにおいて自然な表現はなされるはずです。どうか、そのようにして、こんな大事な宝の持ち腐れをなさらないようだ。

私は『曠愛新書』でもつて戦つていくつもりですから、どうぞ、皆さん、これを活用してください。お金のことはどうでもいいから。

「ああ、この人に何とかして読ませたい」

と思つたら、やつてください。私は本当に福音のために獻げたいし、皆さんも福音のために協力してください。それを私は本当にありがたくお受けしますけれども、もし、本当に福音のためになかつたら、もうお断りします。

私たちは、偽りなく福音のためにといふところなら、本当に力が湧いてくるから。それは、このキリストの生命でなければ、人間はどうにもならないよう出來てゐるんだから仕方がない。ある時は、ぐずぐずしていたら、強引に引っ張つて来たらい。それはいわゆる折伏しゃくふくということではない。けれども、それくらいの動きを——その時その時に示されるんです、動きが——その動きによつて動いてください。一定の法則なんかありはしません。そのところに本当の法則がはたらく。それが本当の無法の法則なんです。

キリストに深く連なつて、この「我なり」の「エゴ・エイミ」なる一言——日本語で結構です、この

「我なり」

というこの一言——この一言は本当に、私たちがキリストに在るときに、

「私だぞ。この私の中のキリストを」

という、この自覚。それが本当に自己を棄てたところの、本当の自己なんです。与えられたる新しき我の告白です。

「もはや、われ生くにあらず。キリストわがうちに在りて生き給うなり」

という、パウロのガラテヤ書2章20節が正に、それを煮詰めれば、この「我なり」の一言に帰するんです。

私は皆さんのが本当に今日、これを胸のうちに、胸の肉碑に刻みこんでくださつたと信じます。何をか言わん。この文字、^{ぶりゅう}不立文字、活ける文字に、皆さんのが即ちキリストの文字そのものとなつたときに、もはや何をか言わん。私はいつ死んでもいい。福音はそれでなければ、もうつまらないよね。



● 我らを見よ

生まれつきの私たちも、ペテロさんと同じように、キリストを否んで、

「ああ、鶏が鳴いてしまった」

なんてなことになる。どうか、「鶏が鳴いてしまった」なんてなことにならないように。ペテロさんは面白なかつたけれども、しかし、その面白いペテロはいくら悔いても、どうにもならんです、この悔いは。けれども、そのどうにもならんやつをとうとうイエスは捕まえた。使徒行伝3章のペテロを見ましょう。

乞食がいました。その時に、ペテロとヨハネは全く聖靈でもつて、彼らは一人だけども一つですよ。

「⁴ペテロ、ヨハネと共に目を注めて『我らを見よ』と言う。

「我らを見よ」と言う。「我らを見よ」とは何のことか。正に、

「我はそれなり」

と同じなんです。

「この我らの中にあるキリストを見よ」

ということです、この「我らを見よ」というのは、靈的傲慢ではない。全く平伏しの魂でなければ、この「我らを見よ」が言えない。

「主さま！」

と言つて、この平伏しの魂が本当の力を持つている。

⁵かれ何をか受くるならんと、彼らを見つめたるに、⁶ペテロ言う『金銀は我になし、然れど我に有るものを汝に与う、ナザレのイエス・キリストの名によりて歩め』。

イエス・キリストの名が、彼らにとつてはどれほど重いものであるか。絶対なものであるか。御名を呼べば、生きてあり給うキリストは答え給う。

⁷すなわち右の手を執りて起こししに、足の甲と踝骨くるぶしとたちどころに強くなりて、⁸躍り立ち、歩み出して、且あゆみ且おどり、神を讃美しつゝ彼らと共に宮に入れり。」（使徒3:4～8）

イザヤ書35章が現象しました。そして、後の方でペテロは何と告白しているか。12節、¹²ペテロこれを見て民に答う『イスラエルの人々よ、何ぞ此の事を怪しむか、何ぞ我らが己の能力と敬虔ちからけいせんとによりて此の人を歩ませしごとく、我らを見つめるか。

人間の信心深きなんていうものではないぞと。信仰とは、我々の信仰が何ものかではない。

「キリストが一切である」

ということ。



と。

¹³アブラハム、イサク、ヤコブの神、われらの先祖の神は、その僕イエスに
榮光をあらしめ給えり。」（使徒3・12～13）

「主さまが、この私たちを通して、その御意を為し給うただけの話だ」と。そして、ペテロを通して、キリストの榮光が現れた。

我々はこの土の器を通して、キリストの榮光が現れ給う。このことを感謝する。感謝するのは、ただそれだけです。キリストの榮光の現れ給いしを感謝する。皆さん一人ひとりのなさることは何でありますても、そこにおいてキリストの榮光の現れたことを、私たちには感謝し讃美する。

もう、人生の在り方、目的、よつてきたるところははつきりします。

「何のために私は勉強しているのでしょうか？」

なんてなことを言う学生がいるからね。そのうちによく語つてやるよ。

なにさま、この聖靈のバプテスマによつて、魂のひつくり返りをしなくては。キリスト教に入つても、とにかく、その一線を突破しないかぎりダメです。とにかく、一人ひとりがそれを言えるんです、

「何か知らんがもうこれは」ということを。

私はとにかく、去年の春からここまで来まして、本当に最後に、この

「我はそれなり」

で、前半期が結ばれたことを感謝いたします。これから先、いよいよ「我はそれなり」の自覚をもつて皆さんと進んで行きたいと思つております。どんな、波風が立つても大丈夫ですよ。

もう、私は言葉がなくなつてしまつた。では、お終いにしましょう。

